四国大学紀要，(A)38：189－197，2012
Bull. Shikoku Univ. (A)38：189－197，2012

資料

紹介　狩野信居筆「職人尽絵巻」

須藤茂樹

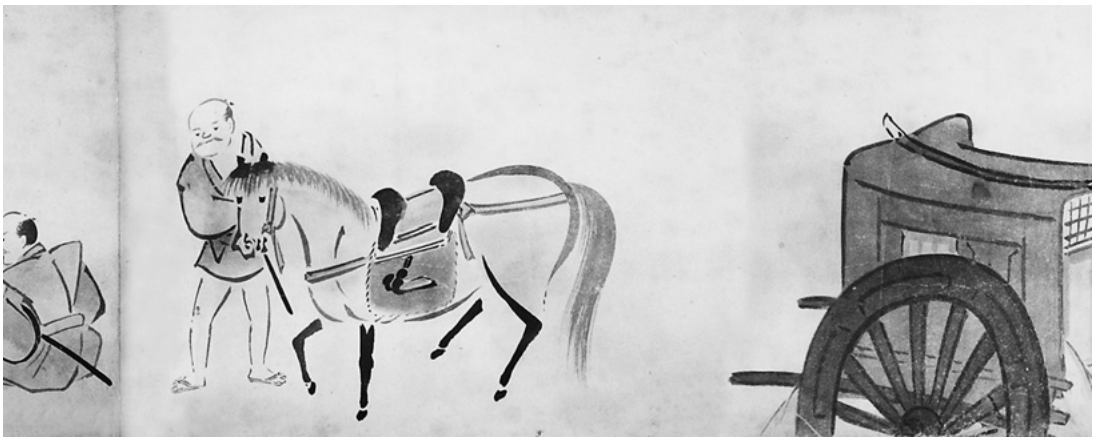
狩野信居筆「職人尽絵巻」を紹介する。題箋はなく、木箱の蓋の表書に「職人　御絵巻物　一軸　狩野信居画」とあること、作品の内容から「職員尽絵巻」と呼称する。板野の宝厳寺史料館に収蔵されている。紹介にあたり、ご便宜をおはかりいただいた同寺の平尾隆信氏には謝意を表する次第である。

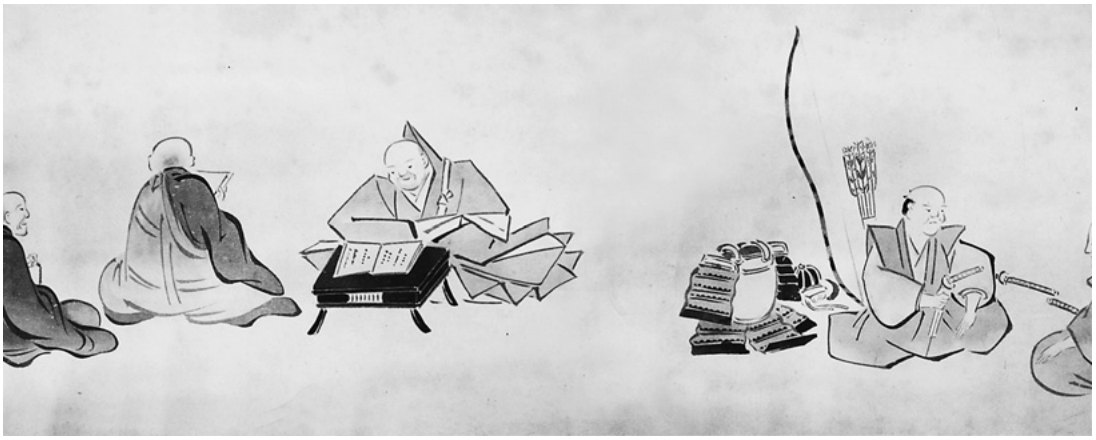
作者は、巻末に「狩野信居筆○（白文朱二重印・印文未詳）」とあることから、狩野信居であることは明らかであるが、その経歴については現在のところ不明である。ご教示をお願いする次第である。時代は江戸時代後期と推定している。作品は紙本著色で、縦二六・八cm、横一五七八・六cm、一五mをこえる長大な絵巻である。一三五cm前後の紙を一二紙継いだもので、装丁も豪華で丁寧な作品である。

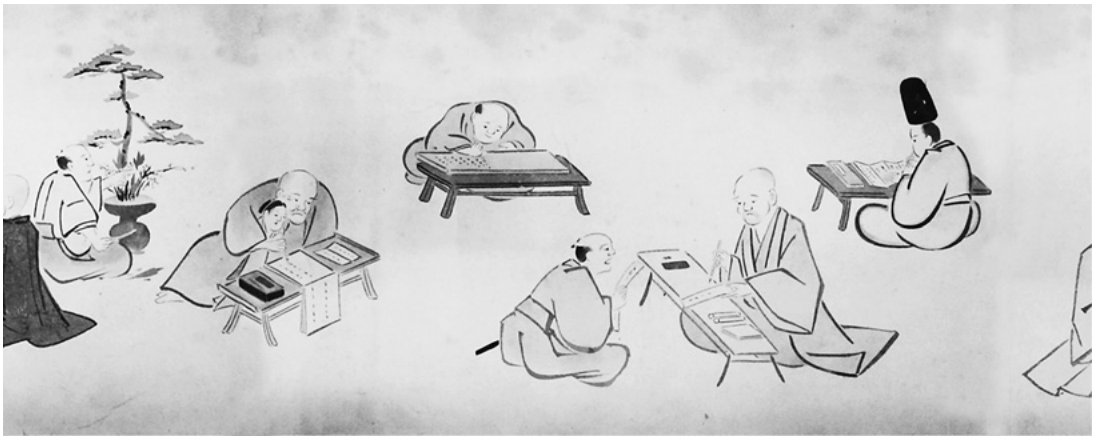
巻頭には牛車とともに公家を描き、ついで馬や甲冑を配した武士を置いている。ついで、僧侶、山伏、祈祷師と宗教者が続き、儒学者、能の謡曲師、眼や傷を見る医師、占星術師、仏師、位牌師、俳諧師、碁打ち、立花や茶の湯、琵琶や琴の音曲、漆工、染物、鍛冶、大工、彫り物師、呉服商、虚無僧、行商人、傘張職人、桶屋、畳職人、紺屋、機織、樵夫、飴細工、傀儡子、猿曳き、六十六部、大道芸人、軽業師、駕籠掻き、茶筅売り、茶店、振売り、旅人、芸人、旅僧、船頭、博打打、馬借、泥棒、荷車、鳥売り、皮革売り、乞食などを描いている。本作品は、ユーモア豊かな軽やかな筆致で、江戸時代後期の多様な貴賤の人びとを描いており、江戸時代の人びとの姿を知る上で興味深い作品と考え、紹介するものである。

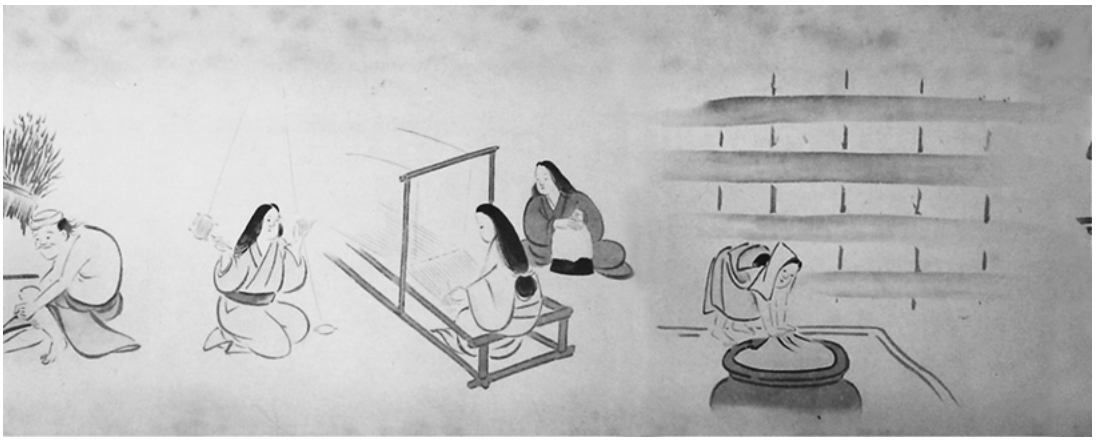
職人を描いた絵画作品は、中世の職人歌合に系譜をたどることができる。鎌倉時代成立の「東北院職人歌合」「鶴ヶ岡放生会職人歌合」、室町時代成立の「三十二番職人歌合」「七十一番職人歌合」が知られている。江戸時代に入ると、「洛中洛外図屏風」など風俗画の影響を受けて、より人々の姿を活写するようになる。浮世絵師の菱川師宣筆の「和国諸職絵尽」（貞享二年・一六八五）、松平定信の需めに応じて描いた鍬形蕙斎筆の「浮世職尽絵巻」三巻など多くの作品を見出すことができる。そこには庶民文化の成熟を見てとることができよう。

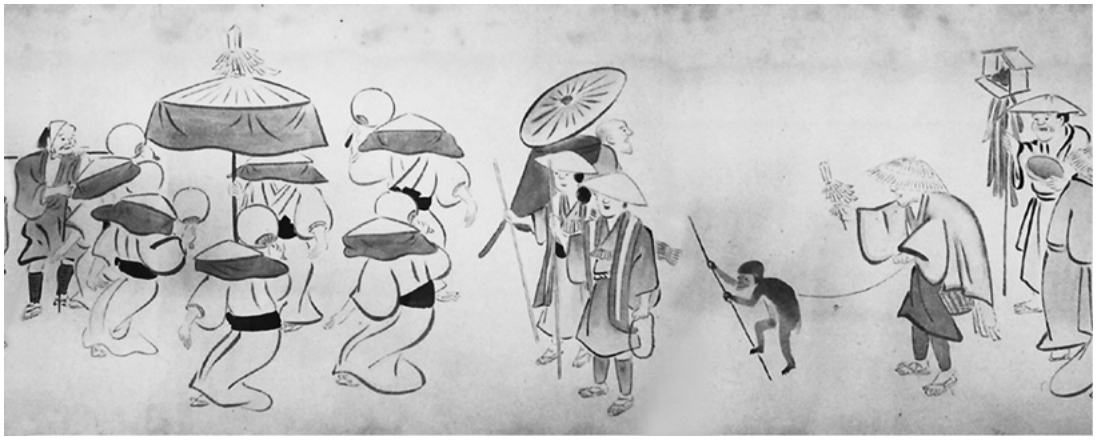
（文学部日本文学科日本文化史研究室）

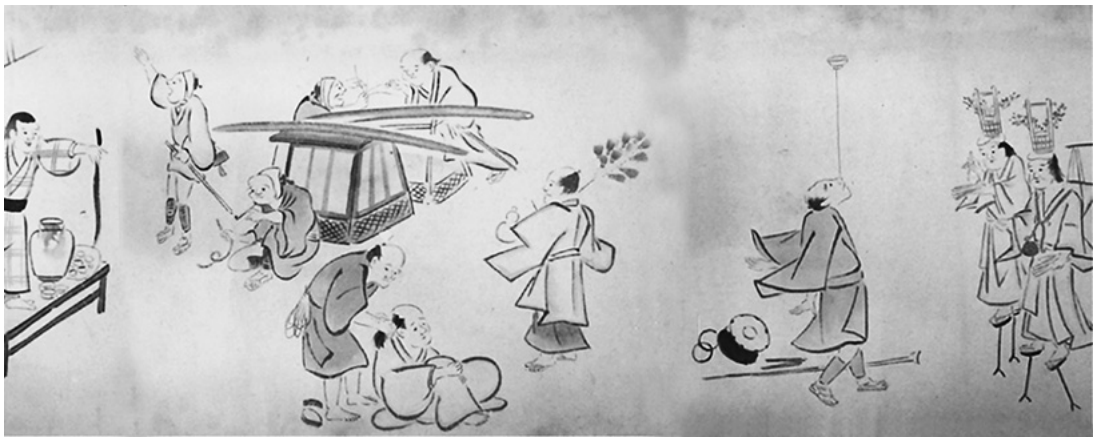


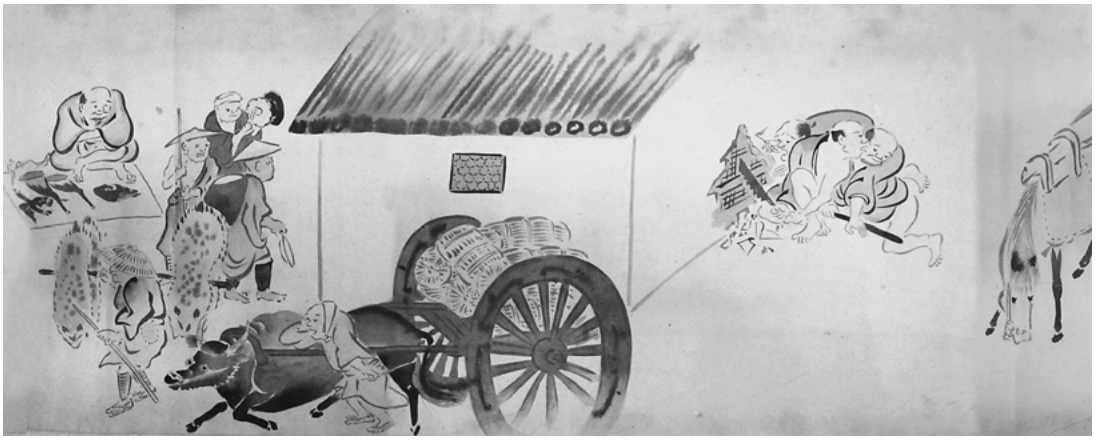


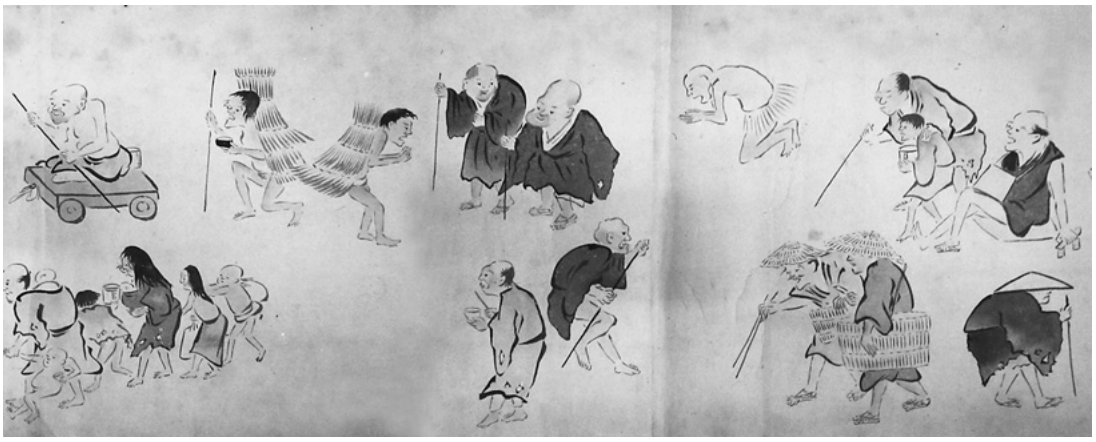












狩野信居筆